

### フィレンツェ歌劇場日本公演『ファルスタッフ』 わたしはアリーチェをこう演じる

#### バルバラ・フリットリインタビュー

彼女を超えるソプラノの存在は、過去にさかのぼっても想像がつかない。バルバラ・フリットリはイタリアが生んだ、まさに空前絶後のディーヴァではないだろうか。眩いばかりの響き、美しくやわらかいレガート、そして、知性と高い音楽性に裏打ちされた、声の強弱や明暗の完璧なコントロール。その気品に満ちた歌唱を維持し、さらに磨きをかけるために、自分の声に本当に合う役しか歌わない彼女だが、そうして驚くほど絞込んだレパートリーの中でも、フリットリ自身がとりわけ大事にしているのが、『ファルスタッフ』のアリーチェである。

今年のフィレンツェ五月音楽祭の目玉は、音楽監督スーピン・メータの指揮、ルカ・ロンコーニの新演出で舞台にかかる『ファルスタッフ』だが、話題の中心といえは、やはりアリーチェを歌うフリットリ。その注目の舞台が2006年9月のフィレンツェ歌劇場日本公演で、プレミアからわずか4カ月で紹介される。もちろん日本でアリーチェを歌うのも、3度目の来日になるフリットリである。その彼女に、オペラ『ファルスタッフ』とアリーチェの魅力について聞いた。

私の声にぴったりだと思えます

ヴェルディ最後のオペラ『ファルスタッフ』は円熟の技法を使って書かれた洗練したオペラで、それまでの作品と趣を異にしています。歌ううえでも難しいのでしょうか？

フリットリ：『ファルスタッフ』は私にとって、すごく楽しい作品で、アリーチェという役を演じるのは、とても楽しいことです。思うに、『ファルスタッフ』は少々変わった特別な演出で、人間味が深く描かれています。この、かつては貴族だったけれども今ではお金もなんにもない老人に対して、みんなで酷いことをします。本当に残酷なはずを仕かけ、一方、老人ファルスタッフはどうか生きてながらえ、相変わらず女性に色気を示します。老人へのみならずは本当に恐ろしいほどですが、私には、そこにヴェルディの精神があるように思えるのです。最後のオペラを書くヴェルディには、人生の核心が見えていた。アリーチェは事態をとても滑稽に見えますが、そこには真実があります。人生がじつじつリアルに描かれています。声楽的には難しい役ですが、演じ甲斐があります。

ロンコーニの新しいプロダクションで、どんなアリーチェ像を私たちに見せてくれるのでしょうか？



うか？  
 フリットリ：今度のフィレンツェのプロダクションがどのようになるか、じつはまだ知らないのです。でも、衣裳画を見ると、結構モダンなようです。いずれにしても、いつも自分らしさを出すように心がけています。昔の衣裳で演じたことも、現代化された衣裳を着たこともありますし、1940年代の戦時中の衣裳も経験しました。衣裳がどうであろうと、登場人物の性質も、行われるはずらの中身も同じですが、たとえば1400年代の衣裳を着るなら、立ち居振る舞いはちょっと変えないといけません。

『ファルスタッフ』は作品の完成度がきわ

ま高いと思います。音楽はもちろん、台本もすばらしいですよね？  
 フリットリ：実際、『ファルスタッフ』の台本はすごくおもしろい。オペラらしく、音楽らしく、また、止まらない時計のようでもあり、美しいイタリア語です。なんと言うか、本当に形式張らないだけイタリア語で、とても洗練されているのです。まさに言葉のやりとりがすばらしく、これほど美しい台本はヴェルディのオペラの中でもあまり例がありません。『シモン・ボッカネグラ』などは見事です

老ヴェルディが自分の楽しみのために作曲した『ファルスタッフ』は、心憎いばかりに人生の本質を突いた、清らかで軽妙洒脱なオペラである。音楽も台本も洗練された興味に満ちているだけに、作品の真価を表現するには、高度に洗練された歌唱が不可欠。まさにフリットリは、これ以上望むべくもないベスト・キャストと断言できる。  
 [取材・文/香原斗志 音楽ジャーナリスト]

が、ヴェルディのオペラの台本は、あまり美しくもないものが多いです。

あなたほどアリーチェをすばらしく歌う人を知りませんが、ご自身でも当たり役だと思いませんか？  
 フリットリ：実際、アリーチェは私の声にはぴったりのように思います。ただ、そこに精神性を込めなければなりません。『ファルスタッフ』はまさに歌われるというより、演じられるオペラです。だから精神性が欠かせないのです。たんに朗々と歌ってしまったり、もうコメディではなくなってしまいます。そして、重唱が多く、ア・カペラに近いところもあり、四重唱、九重唱とあって大変なのですが、それらがみな美しいのです。フィナーレのアンサンブルもじつにきれいです。最後、登場人物も誰もが思い通りにはいきませんでした。そして『この世はすべて冗談』と歌いますが、そこにはヴェルディの魂が込められています。それが、ヴェルディが言いたかったことなんですね。

フィレンツェ歌劇場と日本にいらっしゃることについて？  
 フリットリ：私は日本に来るのが大好きです。すばらしい国で、この4月は満開の桜を満喫しましたが、桜は日本の古い魂のように思えました。それが高層ビル群に押しつぶされそうになっているのは残念でしたが、とにかく、フィレンツェ歌劇場とまた9月に来られるのは、このうえない喜びです。

#### interview

#### バルバラ・フリットリ



## 世界最高のバレエの祭典を飾る輝かしき宝石たち 第11回世界バレエフェスティバル全出演者決定!

女性  
 舞踊手

- ノイマイヤーのバレエ団を担うドラマティック・ダンサー  
**ジョエル・ブローニウ**  
 (ハンブルク・バレエ)  
 Joëlle Boulogne
- 清純なヴィーナス! ロイヤルの次作を担う若手ブレイク・スター  
**アリーナ・コジョカル**  
 (英国ロイヤル・バレエ団)  
 Alina Cojocaru
- 優れた音楽性と技術を備えた可憐なオプéra・ヒロイン  
**ルシнда・ダン**  
 (オーストラリア・バレエ団)  
 Lucinda Dunn
- 優雅にして洗練を極めるオペラ座の華  
**オレリー・デュボン**  
 (パリ・オペラ座・バレエ)  
 Aurélie Dupont
- シュツットガルトが誇る名花、バレエフェス初登場!  
**マリア・アイシュヴァルト**  
 (シュツットガルト・バレエ団)  
 Maria Eichwald
- 情感豊かな物語世界へと誘う当代屈指の演技派バレリーナ  
**アレクサンドラ・フェリ**  
 (アメリカン・バレエ・シアター/ミラノ・スカラ座バレエ団)  
 Alessandra Ferri
- 「史上最強」にして常に進化を続けるバレリーナ  
**シルヴィ・ギエム**  
 (英国ロイヤル・バレエ団)  
 Sylvie Guillem
- 幅広いレパートリーで活躍するオペラ座女性陣の要  
**アニエス・ルテステュ**  
 (パリ・オペラ座・バレエ)  
 Agnès Lestestu
- グルジア出身、コロラド・バレエのプリンシパル  
**マヤ・マッカテリ**  
 (コロラド・バレエ団)  
 Maya Makhateli
- 美しい容姿と強い脚をもつブラジル出身の舞姫  
**レティシア・オリヴェイラ**  
 (ヒューストン・バレエ団)  
 Leticia Oliveira
- 内に秘めた情熱を溢れさせる絶妙なる演技  
**タマラ・ロホ**  
 (英国ロイヤル・バレエ団)  
 Tamara Rojo

- チャーミングな容姿と成熟した演技で魅了する若手プリマ  
**ポリナ・セミアノワ**  
 (ベルリン国立バレエ団)  
 Polina Semionova
- 強靱かつ超人的なテクニックを武器とするバレエフェス常連  
**ガリーナ・ステパネンコ**  
 (ポリシヨイ・バレエ団)  
 Galina Stepanenko
- アメリカで大絶賛を得るキューバ・バレエ団のプリマ  
**ヴィエンゴセイ・ヴァルデス**  
 (キューバ国立バレエ団)  
 Viengsay Valdes
- 探究心に基づくロイヤルさを備えたマリニスキーの華  
**ディアナ・ヴィシニョワ**  
 (マリニスキー・バレエ)  
 Diana Vishneva
- 人気沸騰の演技派、前日に続いての再来  
**フィリップ・バランキエヴィッチ**  
 (シュツットガルト・バレエ団)  
 Filip Barankiewicz
- アメリカの貴公子  
**ホセ・カレーニョ**  
 (アメリカン・バレエ・シアター)  
 José Carreño
- 端正な踊りで名高いロイヤル・バレエ屈指の王子役  
**ヨハン・コボ**  
 (英国ロイヤル・バレエ団)  
 Johan Kobborg
- 20代前半にしてメトロにも例えられる新星  
**ズデネク・コンヴァリーナ**  
 (ナショナル・バレエ・オブ・カナダ)  
 Zdenek Konvalina
- 人気実力急上昇の若手ホープ  
**マシュー・ローレンス**  
 (オーストラリア・バレエ団)  
 Matthew Lawrence
- 観客を魅了してやまないオペラ座屈指の個性派  
**ニコラ・ル・リッシュ**  
 (パリ・オペラ座・バレエ)  
 Nicolas Le Riche
- エトワールのなかのエトワール、バレエフェス7回目参加  
**マニユエル・ルグリ**  
 (パリ・オペラ座・バレエ)  
 Manuel Legris

- 英国ロイヤル・バレエでの初来日に次ぐ再来  
**デヴィッド・マッカテリ**  
 (英国ロイヤル・バレエ団)  
 David Makhateli
- バレエ界の貴公子は、いまやバレエフェスの“顔”  
**ウラジーミル・マラーホフ**  
 (ベルリン国立バレエ団)  
 Vladimir Malakhov
- 多彩なレパートリーを誇り分けるオペラ座のトップ・ダンサー  
**ジョゼ・マルティネス**  
 (パリ・オペラ座・バレエ)  
 José Martinez
- 柔軟な知性と繊細な感受性を備えたノイマイヤー・バレエの理解者  
**アレクサンドル・リアブコ**  
 (ハンブルク・バレエ)  
 Alexandre Riabko
- 永遠の青年を思わせる風貌と官能的な肉体による妖しい美  
**ジル・ロマン**  
 (モリス・ベジャール・バレエ団)  
 Gil Roman
- 強靱なテクニックとエネルギッシュな踊りが魅力  
**ローランド・サラビア**  
 Rolando Sarabia
- 世界各地から引手あまたの実力派  
**ロバート・テューズリー**  
 Robert Tewlesley
- 多彩なレパートリーを誇るヴェテラン・ダンサー  
**イナキ・ウルレザガ**  
 (オランダ国立バレエ団)  
 Inaki Urlezaga
- 真のダンスール・ノールと呼び得る美しき舞  
**アンドレイ・ウヴァロフ**  
 (ポリシヨイ・バレエ団)  
 Andrei Uvarov
- 甘い風貌とフレッシュな演技で人気沸騰  
**フリーデマン・フォゲル**  
 (シュツットガルト・バレエ団)  
 Friedemann Vogel

第11回世界バレエフェスティバル  
 Aプロ  
 8月3日(木) 6:00p.m. 東京文化会館  
 8月4日(金) 6:00p.m. 東京文化会館  
 8月5日(土) 3:00p.m. 東京文化会館  
 8月6日(日) 3:00p.m. 東京文化会館  
 Bプロ  
 8月 8日(火) 6:00p.m. 東京文化会館  
 8月 9日(水) 6:00p.m. 東京文化会館  
 8月10日(木) 6:00p.m. 東京文化会館  
 8月11日(金) 6:00p.m. 東京文化会館  
 指揮: アレクサンドル・ソトニコフ  
 演奏: 東京フィルハーモニー交響楽団  
 共演: 東京バレエ団  
 入場料(税込)  
 S=¥25,000 A=¥22,000 B=¥19,000  
 C=¥15,000 D=¥11,000 E=¥ 7,000

\*出演者は2006年3月20日現在の予定です。やむを得ない事情により変更となる場合があります。あらかじめご了承ください。

### ファルスタッフとは 究極の「ちょい不良 おやじ」?!



『ファルスタッフ』の主人公サ・ジョン・ファルスタッフは、太鼓腹の老人で酒好き、年がいかにも女性を口説こうとするものだから、ヒドイ目にあうわけですが、このキャラクターが、単なる「笑い者」ではなく、人間の人生における辛辣な内容として描きだされていることがオペラ「ファルスタッフ」の魅力です。ある程度の年齢に達した男性が、夢の夢や若さへのノスタルジーを抱き、悲劇的な様相を呈することになったとき、傍目にはそれは喜劇的に映る、というわけです。いま、ちょっとした流行語にもなっている「ちょい不良おやじ」に通じるものがあるような...。流行の方は、主にファッション面でのことが言われがちですが、ファルスタッフは、それを内面にもつ、つまり自身の哲学を徹底した究極の「ちょい不良おやじ」といえるかもしれません。もっとも、左のデザイン画はフィレンツェ五月音楽祭の新演出にあたって書かれた

ファルスタッフの衣裳イメージ。これなら「ちょい不良おやじ」的? フィレンツェ五月音楽祭での新演出プレミアを前に、ルカ・ロンコーニの衣裳をご紹介しましょう。「衣裳を現代風にするのは、何が何でも現代的にという今様かぶれではなく、明確な理由があります。つまり、世代や階級の落差、それに主人公のおちぶれ加減が、歴史的な衣裳よりも、現代風の衣裳の方が際立つと思うからです。『ファルスタッフ』は、ヴェルディと台本作家ボーイトがシェイクスピアの喜劇『ウィンザーの陽気な女房』と悲劇『ヘンリー4世』からつづったもので、喜劇からは登場人物たちの行動の大部分を、悲劇からは登場人物の性格の一端を切り出しています。『ヘンリー4世』ではファルスタッフは死にますが、オペラではまったく違っています。そこで私は、最後の場面をファルスタッフの熱に浮かされた病人が見る一種の夢が幻想としてみようと考えました。ですから、最後の場面も森

やお伽話の世界も、ファルスタッフが懐たおベッドのそばに出現することになります。『ファルスタッフ』の演出において、ファルスタッフをはじめとする登場人物たちを戯画化することや、このオペラを、居酒屋が舞台だからといって、余興みだり道化芝居にしてしまうことは、なんとしても避けたいと考えました。陽気なことは必要だけれど、ただお気楽な代物にしては、いけないのだと。」  
 ルカ・ロンコーニがフィレンツェ五月音楽祭で最初の演出を手がけてから、今年はずっと30年になります。当時も、新世代を担う演出家の一として注目されていたロンコーニは、予想通りの相次ぐ成功を得て、いまや世界の演劇界を支える押しも押されぬ名匠として活躍していますが、彼自身、「実は、演劇的にも、最高の切れ味をもつ『ファルスタッフ』の方が『ウィンザーの陽気な女房』たちよりも高く評価されています。新演出への期待が、いっそう膨らみます。

お待たせいたしました。世界最高にして唯一と称される「世界バレエフェスティバル」。今年の出演者が決定しました。第11回開催から30年を迎える今回は、節目の年に相応しい、これまで以上の豪華な顔ぶれが揃うこととなりました。  
 なかでも、パリ・オペラ座のカリスマ、マニユエル・ルグリとベジャールの申し子、ジル・ロマンの二人は7回目の出演を数えます。人気実力ともに絶頂を誇るシルヴィ・ギエム、永遠の貴公子ウラジーミル・マラーホフ、

ABTとスカラ座で絶対的地位を誇るアレクサンドラ・フェリをはじめとしたベテラン陣は、いまでもありますが、「世界バレエフェスティバル」とも認められているのが「世界バレエフェスティバル」。今回も、オーストラリア・バレエ団や北米、キューバのバレエ団から、21世紀を担う初出場ダンサーたちが登場し、バレエ・ファンを熱く魅了するでしょう。それぞれの演目は当日発表となりますが、ここでしか観られない「世界バレエフェスティバル」ならではの興奮と感動をお約束します。

5月13日(土)10:00a.m.  
 特典付き2演目(S,A,B券)  
 セット券受付  
 (特典については中面をご覧ください)  
 5月20日(土)10:00a.m.  
 一斉前売開始



